

## 高校における生活指導研究（?）

著者	諸岡 康哉, 生活指導研究グループ, 説田 富彦, 寺島 美紀子, 穴田 進, 寺島 紘子, 鳥嶋 正明, 宮嶌 公夫, 寺島 隆吉, 河野 信子
雑誌名	教育工学研究 = Studies in educational technology
巻	10
ページ	21-33
発行年	1984-09-01
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2297/24804">http://hdl.handle.net/2297/24804</a>

## 高校における生活指導研究(II)

諸岡康哉\*・生活指導研究グループ\*\*

本研究グループでは、2ヶ年にわたり、マカレンコの『教育詩』について検討をつみ重ねてきた。その成果については第1報として『教育工学研究第9号』に掲載した。本稿では、2ヶ年にわたる検討の総括として以下、三つの論文を内容としている。

マカレンコの著作の中で最も重要であると指摘されている『教育詩』ではあるが、『教育詩』そのものについての研究論文はほとんどないと言ってよいほど少ないのである。おそらく、『教育詩』が実践的事実を中心としたものであり、マカレンコの理論的記述がみられないため、読みとりにくいためだと考えられる。

本論では、第1に『教育詩』で述べられているコロニストのコローニヤからの追放の問題をとりあげ、第2には、妊娠事件を通してマカレンコの愛と性について考察した。さらに第3には、『教育詩』の文体そのものの検討をし、今後、『教育詩』を読むための一助として位置づけている。なお、論文作成にあたっては各論文末尾に記載された担当者が執筆し、それに研究グループが諸岡を中心として手を加えたものである。また、文中の( )内の数字は、『マカレンコ全集』（明治図書）の巻号、頁数、行数をあらわしている。

### I. 『教育詩』にみるマカレンコの追放の論理

#### はじめに

本稿では『教育詩』にあらわれる追放事例の変遷をとらえると共に、それを通じてマカレンコにおける追放の論理をあきらかにする事を試みる。

尚、追放に関しては、幅広く解釈する事とし、追放の決定のみで現実にはコロニーヤにとどまり得た事例、或いは逆に、自らコロニーヤを出ていった事例等も考察の対象とした。

#### 1. 追放の概観

1920年秋に開設されたゴーリキー・コロニーヤは、その当初において、当然の事ながら無秩序が支配する所であった。「絶望と激怒の極に達していた」マカレンコのザドーロフへの爆発の後に、マカレンコの口から『教育詩』での最初の追放命令「すぐみんなで森に木を切りにゆくか、それともコロニーヤからとっとででもらうかだ」が発せられる事になる。(事例①)

こうして始まった21年にマカレンコをまず悩ませたのは「彼らの習い性となっているけんか好きとちょっとした事でも破壊されてしまう稀薄な集団的連帯性」であった。そして、ナイフによるけんかの横行によってマカレンコはチョボトを追放する(事例②)

\* 諸岡 康哉 金沢大学教育学部  
 \*\* 説田 富彦 石川県立大聖寺実業高等学校  
 寺島美紀子 石川県立松任農業高等学校  
 穴田 述 石川県立寺井高等学校  
 寺島 絃子 石川県立金沢女子高等学校

鳥嶋 正明 石川県立金沢向陽高等学校  
 宮嶋 公夫 金沢市立工業高等学校  
 寺島 隆吉 金沢市立工業高等学校  
 河野 信子 石川県立高浜高等学校

次に彼がとり組まざるを得なかった飲酒、トランプばくちとの闘いでコロニヤとしての連帯感の萌芽がみいだされる様になった。

カラバノフは「みんな、問題は簡単だ。お互いのものをとり合うなんてことは無意味だ」と発言する。

1922年に入りコロニヤの「経済もわれわれの健康も日毎に成長していた」が幾つかの重苦しい事件が起った。その一つが反ユダヤ主義であった。

中でもタラーネツは自分の支配欲のはけ口として、オサドチーは「原始的な才智とヒロイズム」を発揮できる格好の対象として反ユダヤ主義の先頭に立っていた。

マカレンコは「ひそかに用心深く行動するか、さもなければ爆発的に一気にけりをつけるか」と思慮していたが、最後には、シュナイデル、オムトロムホフ（ユダヤ人）の自爆自棄とも言える爆発によってオサドチーと対決する事となった。

ケガをした2人をさして問うマカレンコに、オサドチーは「なーんだ、これですか……ユダが2匹。なにかおもしろいものを見せてくれるかと思ったのに……」と答え、この言葉にマカレンコは満腔の怒りを爆発させた。

4日間の禁固の後でオサドチーは、「コロニヤを出ます」「でていけ」「書類を下さい」「何もやらん！」と追放されたのであった。(事例③)

マカレンコ自身はこうした経験を通して、「集団と集団の機構のできていないうちは、教育者は強制の権利をもっており、強制をやめてはならないという絶対の確信をあえて主張し」、「強い、必要とあればきびしい、活力に満ちた集団をつくるという方針を固守し、集団のみにすべての希望をたくした」のである。

この方針は、次第にコロニスト達自身の中に浸透していった。それ故、プリホジコの国道強盗が発覚した時に、コロニスト達は彼をリンチ

にかけたのであったが、注意しておきたいのはこのリンチはコロニスト個々のむき出しの感情の爆発そのままにおこなわれたものであり、集団自体の公的な秩序だった怒りの表明としての処罰ではない事である。

この様にしてコロニヤ内部には徐々に秩序が生まれてゆくが、コロニヤ外部に対するコロニストのどろぼうはミチャーギンを中心として後をたたなかつた。ただ彼も「コロニヤの名誉は体当りで守ろう」とする意識は持っていた。

マカレンコの禁止にそむいてどろぼうを続けるミチャーギンに、マカレンコは「きみは私とどうしても意見が合わない。別れようじゃないか」と宣言し、ミチャーギンはカラバノフと共に去ってゆく。(事例④)

この事例によってマカレンコは「コロニヤの気風の発展の完全な停止」に「だん固とした処置」をもって早くとるべきであった事を反省するが、コロニスト達はむしろ目の前の楽しみをうばわれた形で「火が消えたように」しょんぼりする有様であった。

しかし、コロニヤをおおった一時的な暗雲は、規律正しい生活や軍事教練の日々を過ごす中にいつしか取り除かれ、コロニヤ内は「昔のようにユーモアとエネルギーがこんこんとわいてき」、カラバノフもコロニヤに復帰した。

さらに注目すべき事は、この23年の冬以降にコロニヤは、組織上の重要な要となる部隊、指揮官会議、さらには総会を持つ様になる。また、この頃第2コロニヤの荒れが目立つ様になってきたのだが、マカレンコのみる所ではその原因は、中核がいなかった事と教師団の働きがまずかったことである。

そのまずい方の教師の筆頭であったロジムチクは根本的にコロニヤと言う集団のために働く事を理解しえず、コロニスト達の総会でも弾劾され、最後にマカレンコから解雇通告をうける。(事例⑤)

23年10月に「コロニヤは、第2コロニヤ

への統合を果たしコロニスト達は、結婚式、収穫と生きる喜びに満ちた日々を送っていたが、突然ヴェトコフスキーが、「ここが気に入らないんです。ぼくが何をやろうと、それはぼくの事です……」とコロニーヤを出す事を言い出した。この発言にコロニスト達は大いに憤慨し、「われわれはかれをコムソモールからおぼり出す」事を決める。(事例⑥)

25年早々にオプリシコは、自分の結婚について多くの持参金を出す事を指揮官会議に申し出、拒否された翌日、酒によって暴れ指揮官会議によって査問される。

「もしオプリシコが新米であったら許してやってもよいでしょう。しかし、こんどは絶対許すわけにはいきません。オプリシコは集団なんかはくそくらえと言った態度をしめました。そんな態度はこれが最後だとみなさんは思いますか？ そうではないことはみんなが百も承知しています」との弾劾の結果、追放を受ける。(事例⑦)

さらにコロニーヤは26年5月、クリヤジにうつって前進を続けていたが、27年『教育詩』にあらわれる最後の追放(ただし、決定のみ)が発生した。

それはアルカジー・ウジコフによってひきおこされた現金窃盗であった。アルカジーは「集団にはみじんの敬意ももたない人間であり、自分の目先の欲だけに生きている人間であった。」

同志裁判が開かれ追放決定が降りるが、教育人民部の関与もあって、コロニーヤ内での謹慎に減刑された。(事例⑧)

これについては表1も参照されたい。

## 2 追放の変遷及び追放の論理

以上、八つの事例を概観したわけであるが、まず気づかれる事は、追放決定に至るプロセスの変化である。

すなわち、事例④までは、追放の決定はマカレンコ個人によって下されていた。それに対して、23年冬以降コロニーヤ内に指揮官会議等が

確立してからは、マカレンコの専決による追放は行なわれず、何らかの形で必ず集団討議に付される様になっている。

この決定を下すに至るプロセスの変化は、当然決定を下す者の意識、さらには数の変化を反映している。

初期の段階においては、犯罪的行為に対して怒りを感じるのはマカレンコのみなのであるが、後になるとコロニスト全体が怒りを感じる主体になっている点に注目せねばならない。

さらに論を進めれば、このマカレンコの怒りをコロニーヤ全体に広げられた事こそがゴークキー・コロニーヤの集団確立の主因ではないかと考えられる。

また、このプロセスの変化については、コロニーヤとしてはそうせざるを得なかった側面もある。と言うのは、20年の発足当初には六名であったコロニーヤの人員も年と共に漸増し、22年暮れには60人、23年秋の第二コロニーヤ統合移転時には80人、26年5月のクリヤジ移転では400人になんなんとしていたわけである。

この大所帯をまとめてゆくためには、どうしても構成員一人一人の意志を背負った代表者の合議制がしかれねばならない。さらに言えば、構成員全員による総会も保証されていなければならない。

この必然の発明とも言える指揮官会議、総会ではあるが、逆にこの両者を具備しているからと言ってその集団は質的に高いかと言うと必ずしもそうではない。

その事実は、現在のほとんどの学校における生徒会、生徒議会のあり方を見る事によって、察知する事ができる。

その事を頭に置きながら、『教育詩』における追放の論理をみてみたい。

最終的に、マカレンコが、そして、後にはコロニスト達が問題とするのは、その行為が自分達の集団にとって有害であるか否かである。

しかしながら、初期の段階ではこの事自体が問題視されるよりも、まず、自分達を集団の構

表1 追放の概観

事例	時期	被追放者	追放宣言者	合議の 関与	追放事由	復帰	本文頁
①	21年初め	最初の6名	マカレンコ	—	指示を守らず、初めてマカレンコをお前呼ばわり	宣言のみ	I-20
②	21年	チョボト	マカレンコ	—	刃物使用のけんかが甚だしい	○	I-55
③	22年初め	オサドチー	マカレンコ	—	コロニストの中の、ユダヤ人の虐待	○	I-92
④	22年秋	ミチャーギン 及び カラバノフの追従	マカレンコ	—	コロニヤ外部に対する泥棒の主謀者	ミチャーギン × カラバノフ ○	I-155
⑤	?	教師 ロジムチク	マカレンコ	○	コロニヤの為に真剣に働かない	×	I-184
⑥	24年暮れ	コスチャ・ ヴェトコフスキー	(マカレンコ)	○	自己申告 「ここはおもしろく なくなりました」	○	I-324
⑦	25年初め	オブリシコ (ドミートロ)	(マカレンコ)	○	直接には酒乱 間接には反集团的行為の積み重ね	×	I-330
⑧	27年(?) 10月	アルカジー・ ウジコフ	マカレンコ	○	現金窃盗	追放されず	II-185

追放に関して幾つかの観点からまとめた表である。要点のみをまとめた表であるため、個々の追放に関しての詳細は『教育詩』自体に立ち戻って明らかにされたい。

成員として意識しない行為に対するマカレンコの怒りがある様に思う。

従って、追放も集団の一員として、自らを意識しない者への最後の手段であった。

まずコロニスト達に集団たれと要求している箇所は初期の部分に散見される。

例えば、第1部9節において「弱い同志を守ってやるものがコロニヤにはいないということになる。そうなる、このわたしが守ってやらなければならない」とマカレンコは言い、これに答えてカラバノフが「みんな、問題は簡単だ。お互いのものを取り合うなんて事は無意味だ」と述べている部分によって、前記のマカレンコの考え方が徐々にコロニヤに浸透してい

っている事がわかる。

そして、この浸透をより強力にしているのはマカレンコの持つ人間性の冒瀆に対する強い怒りと、コロニスト達も「教師は自分たちに敵対する勢力ではないという信念をつねに示」さざるを得ない程の「だれの目にも明らかな困難な教師のしごと」を遂行する教師達の姿であつたろう。

私見ではあるが私は、この二つの点にかなり現在でも教師が生徒間に切り込んでゆく際の要諦があると考えている。

さて、もう一点追放の論理でみておきたい事がある。

先程追放の要件として、その行為の集団への

有害性、犯罪性をあげたが、この有害性の中味には、多分に倫理的側面を持っている事がそれである。

すなわち、事例④においてマカレンコはミチャーギンを排除する事により、自分達の集団内部におけるのみならず外部に対してもモラルを保つ事を要求する。そうする事が集団の利益へとつながってゆくと考えたからである。

コロニスト達も内心でその事を感じていたのは、概観でみたプリホジコへのリンチでも了解できるが、マカレンコのこの姿勢によってますます強化されていき、後には自分達の集団に対する誇りも形成されている。例えば、事例⑥にあるヴェトコフスキーに対するコロニストの発言「おれたちのことじゃないなんて、よくもほざいたな！おまえがかっぱらいをやっても、おれたちの事じゃないというのか？」等によってその事は理解されよう。

現在、我々の社会には、多様な集団がみられるが、その集団が質的に高まったかを見る一つのポイントとして、その集団の構成員が自分達の集団に誇りを持っているかどうかを考えられるのではないか。

逆に言えば、自分達への誇りが持てる様に指導してゆく事も集団指導の際に必要な観点の一つではないかと思う。

今の学校を見るならば、この事は全く学校外部からの進学率云々と言った評価にのみ生徒も教職員も従ってしまっている所に問題の一端がある。ただし、この様な観点のみで学校をみる事に固執する社会自体にも問題は大きいにある。

最後に、二点指摘したい。

第一点は、被追放者のコロニーヤへの復帰である。『教育詩』をみる限り復帰は何ら防げられておらず、追放する側のコロニストやマカレンコも度々「いつでも戻ってこい」と述べている。

これは、現在の高等学校とコロニーヤとの間にある一つの大きな差異であろう。

もう一点は、表1にみるように、ほとんど全

ての事例において、合議は経るが、マカレンコが追放の宣言、或いは許可を行なっている点である。

これら二つの事の持つ意味が何であるのか、現段階の私には審らかにしえないが『教育詩』にある追放に伴う特徴点としてあげておく。

### おわりに

本稿では、『教育詩』の追放の変遷及び追放の論理の幾つかの特徴を指摘した。

今後、明らかに出来なかった問題や現在の退学に流れる論理との比較等について考察を続けてみたい。  
(文責、鳥畑正明)

## II. マカレンコにおける愛と性の指導

### ——ヴェーラの妊娠事件を中心として——

#### (1) はじめに

今日の日本の高等学校では、女生徒の「妊娠」は、うむをいわず退学処分となるのが通例である。しかも隠密裡に処理されることが多い。妊娠という事実が発覚すると、「腐ったリンゴ」を取り捨てるように退学させる。結果として当人の「学習権」も奪われるということにもなり、女生徒たちは、ひそかに中絶して学校を続けるか、退学して産むかの選択を迫られるのである。

今、高校生の性体験率は、高校生全体の約一割といわれ、十代の中絶は急増している。

今日の学校現場においても、生徒の愛と性の指導の問題は、「くさいものにフタ」では済まされず、教師の倫理観を厳しく問い直すところから、前向きに考えていかなければならないのではないだろうか。

マカレンコは、愛と性の指導についてどう考えているか。VI巻『わたしの教育経験からのいくつかの帰結』や『教育学と倫理学との諸問題にかんする報告と論文』において彼の考え方が示されている。又、V巻『子どもの教育について』という論文の中で「性教育」という項目を設けて、彼の性教育観が示されている。

『教育詩』においては、愛と性にかかわって具体的に叙述されている箇所は、次のとおりである。「」は各章の題名である)

- ①ライサーの妊娠・赤ん坊殺し事件(「うちの  
がいちばんりっぱさ」)
- ②ロマンスの誕生(「ミルクのつば」「キュー  
ビットの矢」)
- ③コロニストの結婚と指揮官会議の決定(「結  
婚式」「愛と詩のたわむれ」)
- ④チョボトの失恋・自殺事件(「悲鳴をあげる  
な」「やっかいな人たち」)
- ⑤ヴェーラの妊娠事件(「釘」「生活はどんど  
ん進んだ」)

マカレンコは「再教育のしごとで、両手にだ  
かれたことのある女の子ほどやっかいなもの  
はない」(II-166)と述べている。

ヴェーラの妊娠事件では、その再教育の過程  
が見事に描き出されている。

本稿では、愛と性の問題を考えるための一助  
として、ヴェーラの妊娠事件をとり上げ、一つ  
の資料として提示したいと思う。

## (2) ヴェーラ事件の概要

ヴェーラ・ベレゾフスカヤは、ゴーリキー・  
コロニヤが、クリヤジに移転することになっ  
た直前に、コロニヤにひきとられてくる。16、  
7才のヴェーラは、その時すでに妊娠していた。  
このことをマカレンコに告白すると、彼は、即  
中絶に同意した。

コロニヤのクリヤジでの生活が軌道にのり、  
本格的生産が始まり、生活が豊かになった頃、  
ヴェーラの事件が起きた。

ヴェーラは、その後「なかずとばず」で働い  
ていたが、やがて街の女だった頃のように、次  
々と新手の相手を見つけてはセクシーにふるま  
うのである。彼女の相手になった男は指揮官会  
議で「粉碎」されるので、彼女は相手をコロ  
ニヤの外に求めた。

とうとうヴェーラにも最後の時がきた。彼女  
は妊娠した。彼女はマカレンコに中絶するため

の手紙を書いて欲しいと懇願するが、マカレン  
コは「産みなさい」とはねつける。

ヴェーラが妊娠していることはコロニヤに  
知れ渡ったが、コロニスト達はヴェーラをひや  
かしも、いじめもしなかった。

指揮官会議では、彼女を妊娠させた相手を召  
喚してヴェーラとの結婚を迫った。相手の男は  
結婚する気はあったが、ヴェーラの方は彼と結  
婚する気はなかった。マカレンコは、彼女と対  
決した。ヴェーラは結婚をあくまで拒否した。  
マカレンコはそれには同意したものの、中絶は  
許さなかった。

マカレンコは指揮官の少女達に意見を求めた。  
彼女らは、マカレンコを支持した。

ヴェーラは、なおも中絶の同意を迫ったがマ  
カレンコは断固として彼女の要求を拒否する。  
マカレンコは、この機会に人生哲学をさずける  
ことにした。ヴェーラは、ひじょうにゆっくり、  
ゆっくりマカレンコのそばに耳を傾け、恐れ  
も嫌悪もなしに、自分の将来をながめるよう  
になってきた。出産にむけてマカレンコはコロ  
ニヤの女子軍をねこそぎ動員した。指揮官会議  
はヴェーラのために個室をあてがった。

さすがのヴェーラもマカレンコと和解し、帝  
王切開をせがんだあの情熱をもって母性のしご  
とに没頭した。

ヴェーラは男の子を産んだ。彼女はまめまめ  
しく、愛情深い聡明な母親としてまれにみる天  
分をあらわした。彼女は会計課で働くことにな  
った。

## (3) 考察

ヴェーラ事件においては、ヴェーラの執拗な  
までの中絶願望に対して、これまたマカレンコ  
が、その要求を断固として退け、出産を迫る。  
その間のマカレンコとヴェーラのやりとり、他  
のコロニスト達との関係、そしてヴェーラが次  
第にマカレンコの要求を受け入れ出産するとい  
う過程が描かれ、読む者にぐいぐい迫ってくる。

「妊娠」という事実は、人の運命、とくに女

性の運命を大きく変える要素ともなる。未婚の若年妊娠、わけても修学途上にある子どもに対しては、本人の将来を考えて「中絶を」という解決法がとられることが多いが、マカレンコの指導は違った。なぜ彼は、ヴェーラに選択の自由を与えず、出産させたのであろうか。

ふつう、中絶を忌避するのは、「生命」の畏敬からくる罪悪感や、中絶の危険から母体を守るという観点からであるが、マカレンコの場合はそうではなかった。

ヴェーラがコロニーヤへ入所する時には、他の者には「腎臓病」といつわって入院させ、こっそりと中絶させたのであって、マカレンコの過去を精算し、過去を問わないという姿勢はここでも貫ぬかれている。街の女ヴェーラは、もしその時妊娠していなかったら、コロニーヤに来なかったかもしれない。彼女は中絶に賭けて来たのかもしれない。いずれにしても、女にとっての望まぬ妊娠は、大変重いことである。

入所後の彼女の中絶はなぜ認めなかったか。マカレンコはヴェーラの妊娠に対して三つの見通しを持ったその上での指導ではなかったかと思われる。

まず第一に考えられるのは、出産後の母子の生活を保障してやることのできるという見通しである。子どもが生まれたあとの責任について、単に経済的側面だけではなく、コロニーヤ全体が母子の生活を保障していく。このことはマカレンコの指導の大前提になっている。今の学校現場では、この産んだあとの責任が持てないが故に、もう一步、指導が踏み込めないという弱さがある。

とはいえ、マカレンコも、浮浪児達の更正施設であり、再教育の場で、しかも、当時ソ連唯一の男女共学のコロニーヤで（非行者のコロニーヤでは、男女共学は法律で禁止されていた）世間の注目をあびていただけに、男女間の醜聞ともとれる妊娠事件については人一倍恐れていたのであろう。

第一部、ライーサの妊娠、赤ん坊殺し事件で

は、ライーサが妊娠しているらしいというわさを告げられ、マカレンコは動揺する。「わたしはぞっとした。考えてもみてください。子どものロコーニヤで女の子が妊娠したという複雑な状態を。わたしはコロニーヤの周辺に町に国民教育部に、必ずや待ってましたとばかり、コロニーヤは性的にびん乱している、コロニーヤでは男の子が女の子といっしょにすんでいる、とものすごい金切声をあげるであろう偽善の徒や君子がわんざといることを感じた」（I-100）と恐れながらも、自分にいい聞かせるのである。「なにをそんなに心配するんだ？妊娠したら子どもをうむまでだ。いまはかくしても、生まれたらかくしきれなくなる。なにもこわいことがない。赤ん坊が生まれる。それだけのことはなしじゃないか」（I-100）

そしてライーサに「妊娠しているなら、それをかくさなくってもいいんですよ。このコロニーヤでもよかつたら就職のおせわをしてやるし費用の心配もしてあげる……」（I-101）言うのである。

マカレンコ自身が、出産後の生活の保障という見通しを持ったところで、世間の目を恐れることなく、指導できるようになったのであろう。これは、マカレンコ自身がコロニーヤを単なる更正施設ではなく、生産労働を含んだ生活共同体として構想していたからではないかと思われる。

コロニストの恋愛について、恋愛は教育とは反するものだと述べながらも、「われわれがゆたかであったら、コロニストを結婚させて、コロニーヤの周辺に妻のあるコムリモール員たちを住ませるのだがなと空想していた。いったいそのどこがわるいのだろうか？しかし、そこまではまだまだ前途りょう遠であった。悲観することはない。窮すれば通ずる。わたしは教育家的な干渉で恋愛する人たちをいじめることはやめたい」（I-260）と述べている。

ヴェーラが出産後、祝学官ゾーヤが来て、醜聞事件とみなし、調書をつくるよう指示したが、



マカレンコはあくまで調書をつくることを拒否し、ゾーヤを帰すのである。身を挺してマカレンコはヴェーラをかばったのである。

第二の見通しとしては、マカレンコは、もしヴェーラの中絶を認め、中絶させたとしたらヴェーラがもっとダメになってしまうのではないかという見通しを持ったためではなかろうか。産ませることを迫ることはとことん彼女を追いつめることでもある。追いつめることを通して「自分自身」に対峙させ、人生や生活とは何かということを経験させたからではないだろうか。

「まだ少女期といっていううちに性生活をはじめた女の子となると、ただ遅れているだけでなく——肉体的にも精神的にも——きわめて複雑で病的な深い外傷を身におっている。……苦悩とうぬばれ、貧しさと豊かさ、夜の涙と昼の奔放というこの複雑きわまりないからみあいのなかで、線をさだめ、それを歩み、新しい経験、新しい習慣、慎重と臨機応変の新しい形態をつくりだすためには、悪魔的な性格が必要である」(II-166)と述べている。

以下、マカレンコとヴェーラの応答を中心に書き出してみたい。

マカレンコ「生きるということはまじめなことなのです。人生をもてあそぶことはいけませんし、危険なことです。きみの生活にまじめなことがおこったのです。きみはひとりの男を愛したのです……結婚しなさい」(II-168)

ヴェーラ「わたしが結婚するなんて、とんでもない見当ちがいよ！……おまけに、子どもをあやさないだなんて。……あたしにや愛したひとなんかひとりもないわよ」(II-168)

マカレンコ「愛したひとがひとりもないって？じゃきみはふしだらなまねをしたんですね？」「わたしのいいたいことはですよ、きみにふしだらなゆるさがないということです！きみは男となれあった、こんどはきみは母になるのです！」(II-168)

しかし、このようなマカレンコのことは何

らヴェーラにとどいていない。ヴェーラは中絶の為なら帝王切開も辞さない構えで「生めないわ！そのつもりでいて！首をつっても、身投げしても生みはしないから！」(II-171)と激しく抵抗するのである。「彼女は髪をばさばさに乱し、泣きはらし、悲しみにうちひしがれてやってきては、わたしの前にすわりこみ、これで人生がおじゃんになったとか、わたしは冷酷だとか、帝王切開がうまくいった例がたくさんあるとか、言語道断なたわごとを持ち込んだ」(II-172)のである。

マカレンコは「この機会を利用して、おはなしにならぬほどヴェーラに欠けている必要欠くべからざる人生哲学の若干の基礎知識を彼女にさずけることにした」(II-172)

マカレンコ「きみはとてもよくばりだから、悩むんですよ。喜びも楽しみも満足も慰安もきみはほしがっている。人生、それは、無料のお祭りだと考えている」「お祭りはたまにあるものです。人間には労働とかいろんな苦労とか義務とかのほうが多いんです。働く人たちはみんなそんなふう暮らしているのですよ。そんな生活のほうに、きみのいうお祭りよりももっとたくさん喜びと意義があるのです」

ヴェーラ「じゃ先生にいわせれば働く人であれば、いつも悩まなければならぬんですね」

マカレンコ「なんで悩むことがあるんです？しごとと労働の生活、それもまた喜びですよ。ほら、きみに男の子が生まれる、きみはその子が好きになる、きみは家庭をもつことになるし、むすこの面倒をみることもなる。きみはみんなとおなじように働いて、ときどき休んだりするわけです。そこに生活というものがあるのです。きみのむすこが大きくなったら、その子をやみにほうむることを許さなかったわたしにきみはときどきありがとうとお礼をいうようになりますよ」(以上II-172)

このような「会話」と「時間」とを経て彼女は次第に出産を受け入れていくのである。

第三点目の見通しとしては、コロニストとい

う集団との関係において、集団がこの事件に対処しうるだけの力を持っているというマカレンコの見通しがあったのだらうと思われる。

コロニスト達は、ひとりもヴェーラに対し、失礼なことばもいわなかったし、軽蔑の視線も投げなかった。妊娠と出産は少年たちの目には恥でも不幸でもなかった。このことはマカレンコにとってあらためてコロニスト達の気高さを認める機会となった。指揮官会議は相手の男を召喚し、決着を迫るのである。

さらに、マカレンコは指揮官の少女達に意見を求めた。その中の一人は「それが正しいと思います。もし彼女にあれをしてやったら、彼女はすっかりだめになってしまうと思います」(II-172)と述べ、マカレンコの指導に同意し、協力するのである。コロニスト達はヴェーラをかばい、出産の準備体制を整えていった。

マカレンコは、恋愛や結婚を個人的な次元でなく集団の中でとらえている。IV巻において「集団の利益を勘定にいれない行為はどれもみな自殺行為である」と述べ、恋愛や結婚に「理性と常識の参加」(VI-459)を求めている。「集団に責任を負う習慣は恋愛関係のなかでも現われる」(VI-290)とも述べている。

ヴェーラの妊娠、出産はコロニヤという集団にとってプラスとして働いたことは間違いない。

#### (4) おわりに

恋愛の倫理的問題についてのマカレンコの見解は、V巻VI巻に記されているが、ここではそこまで言及できなかつた。

ヴェーラの妊娠事件の指導については、うまくいったことは読みとれるが、マカレンコのどのような指導が、ヴェーラの何を変革させたか、私には、いまひとつ読みとれなかつた。

さらにこの指導を今の日本の学校教育の現場で即適用するには、問題を多々含むであろうとも感じるのである。(文責 寺島絃子)

### III、『教育詩』の文体論的検討

#### ——『教育詩』を読むために——

#### 1 はじめに

マカレンコの『教育詩』を読み出してから1年が過ぎた。最初に通して読んだ時、これはなかなかおもしろい読み物だと思った。始めは、研究会で毎回取りあげている章に早くたどり着こうと思い読んだ。たどり着くと、今度は早く最後まで読んでしまおうと思い読んだ。そういう風に、とにかく、早く先へ先へと進みたくなる本であった。

さて、読み物としておもしろかったというのは個人的な意見としてまあいい訳だが、研究会ではそうもいかない。毎回、3章あるいは4章を読み、問題点を取りあげ、議論し、マカレンコの教育実践を研究する。ということは、何よりもまずテキストの読みがすべての基本としてある訳である。『教育詩』を研究会で読んできて、毎回、必ずレポーターがいて、議論する章のレジメを作成してレポートする訳だが、どうもそのレポートがわかりにくい。いったいその章にどんな事件が起ったのか、あるいはその章の主なトピックは何なのか、それがよくわからないうちにレポーターの発表が終ってしまうのである。こちらの勉強不足があるにせよ、もっとわかりやすいレポートが出来ないものか、もっとうまく『教育詩』を読むことは出来ないものか、といろいろ思いをめぐらすことの多かつた1年であった。

いろいろ思いをめぐらしているうちに、構成という点に着目すれば、かなりすっきりと読み、理解が深まるのではないかと考えるようになった。そこで、『教育詩』を読む時に頭に入れておいた方がよいと考えられるいくつかの点を指摘することにした。

#### 2 構成に着目して

##### (1) 三部構成

まず、『教育詩』の各章はそれぞれいくつか

のトピックで構成されている訳だが、三部構成が原則になっているということがある。

きっちりした三部構成の例を第3部第12章「生活はどんどん進んだ」で説明してみよう。この章はII-166上16とII-173下123を境として内容的に3つの部分に分けることが出来る。最初の部分はコロニヤの生活の様子が描かれている。「きびしく楽しい労働の日々」や「本格的生産」や「生活をつつけ豊かになっていった」様子が説明的な口調で語られている。真中の部分はヴェーラ・ベレゾフスカヤに関する事件のことが描かれている。ここではヴェーラが不意な妊娠をし、中絶させるようマカレンコに迫るが、マカレンコがそれを拒否し、彼女に子供を産ませ、「帝王切開をせがんだあの情熱をもって母性のしごとに没頭」するまでに彼女を指導していく様子が実に見事に描かれている。最後の部分は「われわれの生活はどんどん進んだ」で始まっていることでわかるように、コロニヤの生活の様子がまた描かれている。ただ最初の部分とはトピックは勿論違い、訪問に来るお客のこと、復活祭のこと、ヴェーラのその後のことなどが描かれている。

この章の構成をこのように内容を検討した上で見た時、最初と最後の2つのコロニヤの生活の様子を描いた部分で、真中のヴェーラ事件をいわばサンドイッチの様にはさんでいることがわかる。そして、やはりこの章の中心は真中のヴェーラ事件のところにありということを考えに入れると、この3部構成は、前文・本文・後文の形を取っていることがわかる。

こうしたサンドイッチ型の3部構成は、例えば第3部第13章「子どもをお助けください」も同じで、前文・後文に相当する部分は、ジェルジンスキー・コムーナに関する記述の部分（II-181上117までとII-189上17から）であり、真中の本文に相当する部分は、アルカジー・ウジコフの窃盗事件とそれを裁く同志裁判を描いた部分となっている。

しかし、マカレンコの『教育詩』の各章は、

こうしたきっちりしたサンドイッチ型の3部構成よりも、むしろ変形された3部構成の方が多い。第2部第13章「愛と詩のたわむれ」を見ると、オプリシコの結婚問題を議論する指揮官会議の部分（I-327下19まで）、オプリシコの酒乱の一件を議論し追放を決定する指揮官会議の部分（I-330下18まで）、3月のコロニスト達の様子の部分の3つの部分に内容的に分かれていることがわかる。この場合、最初の部分と最後の部分は、サンドイッチ型の場合のように同じ比重を持つものではない。章の中心は、やはりオプリシコ追放が決議される真中の部分であると考えられるが、きちっとした前文・本文・後文の関係ではなく、一種の変形3部構成といえよう。『教育詩』の中にはこのような例は他にも多く指摘できるし、章の中心が変形3部構成の最後の部分にある例も多い。また、3部構成とは考えられない例外も勿論あることは言うまでもない。

しかし、要するに、いかにすれば『教育詩』をわかりやすく読むことが出来るかを考えた時、そのトピックを整理し、構成に着目することはきわめて大切なことである。コロニヤの出来事が次から次へと雑然と列記してあるようでありながら、やはりそこには中心となるべき事件なりトピックがあるのである。3部構成という概念を念頭においておけば、読むための大きな武器になることは間違いないと考えられる。

## (2) 時間指定と会話密度

次に指摘できることは、各章における重要なトピックの記述部分と、時間指定及び会話密度に関連性があるということである。

『教育詩』を読んでいくと、いろいろな時間の指定がある訳だが、時間を細かく区切って指定し記述してある部分は、それだけ会話のやりとりもさかんで、テーマと密接に係っている場合の多いことがわかる。

『教育詩』は全巻を通じていったい何年の出来事か、春夏秋冬いつの出来事か、何月の出来事かが書き込まれているので、年譜のようたも

のを作ることが出来るはずだし、あれば便利だと思っただけ、そうした大きな時間指定ではなく、1週間後とかあくる日とか2時間後とかいった細かな時間指定がもう一方にあり、それが大きな時間軸の設定とは別に、時間軸を気体の入った管と例えれば、いわば中の気体の濃度の高くなっている部分を表わすものとして作用しているといえる。

第2部第14章「悲鳴をあげるな！」はラブファク生の帰省の部分（I-332上117まで）とチョボトの恋愛問題の部分（I-334下115まで）とメーデーの雨中行進の部分の3部構成になっている。この章の3部構成は比重のほぼ同じ3つのトピックから出来ている訳だが、最初のラブファク生の帰省の部分の時間指定は「4月のなかば」にラブファク生が帰省し、「夕方」にラブファク生達がそれぞれの感慨を述べる2つだけである。それに対して、チョボトの恋愛問題の部分の時間指定は「1925年の夏に近づいていった」という大きな時間指定で始まる。そして「3月」にチョボトがコロニーに帰って来る、「1週間たつ」とナターシャなしじゃ生きていけないと逆上してしまう。そこでマカレンコが「次の日の晩」ナターシャを呼びつけて彼女の気持ちを聞く、「よく朝」チョボトにナターシャの気持ちを伝える、「夕方」チョボトの指揮官にチョボトに対する注意を要請する、という風に細かな時間指定で話が進行している。最後のメーデーの雨中行進の部分も、「前の日朝」の様子から、「晩」のコロニストの集会、「朝」の様子、「7時」の集合ラップ等と細かい時間で話が進行している。

このように、ラブファク生の帰省の部分は時間指定の細かな進行はないが、後の2つの部分は細かな時間指定で話が進行するとともに、指定ごとに会話のやりとりがしっかりと描写されている。そして、それぞれの部分が、チョボトの恋愛問題をめぐって関係のあるコロニストに対してマカレンコがどう接したか、雨の中であるにも係らずコロニストが決定した行進をどう

貫徹させたか、といった問題を含む重要な部分であることが分かる。

要するに、時間指定が細かくなり、緊張度が高まって話が進行している部分は、『教育詩』の中でも重要な部分となっていて、同時にそうした重要な部分は、マカレンコとコロニスト、あるいはコロニスト同士の会話がくわしく描かれていると指摘できる。言い換えれば、『教育詩』においてトピックとして重要な部分は、概ね密度の濃い時間軸と内容の濃い会話に支えられていると言える。従って、この点を念頭において『教育詩』を読んでいけば、問題点の所在が割合容易に見えてくるはずである。

### (3) 題名と内容

3番目として、各章につけられた題名と内容との係りが、比較的複雑であるということがあ

る。国語の授業では、よく題名読みという作業が行なわれ、題名から作品にアプローチし理解を深める方法があるが、この『教育詩』の場合も、題名読みをすることは、作品を理解する上でかなり有益な方法である。特に『教育詩』の場合、各章に記述されている複数のトピックをたくみに統括して題がつけられている場合が多い。

例えば、第2部第7章「補充」では、コロニーで使う馬の補充、しかもさんざん苦勞して見つけ出したゾリカとソフホーズから手に入れたモロジュツの2頭の馬の補充の様子をくわしく描くと同時に、その中間部分に補充生として来た新しいコロニスト達がコロニーに慣れていく様子が描かれている。つまり、この場合、題名の「補充」とは、2頭の馬の補充とコロニストの補充の両方を統括してつけられている訳であり、このことが理解されれば、自ずとこの章のトピックが何であるかも理解されるのである。

これは簡単な例であるが、『教育詩』の中にはもっともっと複雑にいろんな意味を込めて題名がつけられているものもある。（「やっかいな人たち」「釘」「存在」「ほうび」等々）とに

かく、題名の持つ意味を明らかにしていくことは、内容を把握する上で大切なことであり、『教育詩』の場合には、題名にいくつもの意味が込められている場合の多いことが指摘されるのである。

### 3 おわりに

以上、『教育詩』を読むために頭に入れておいた方がよいと考えられる点を3点指摘してみた。

『教育詩』は、単に1つの物語として読んでいっても十分興味ある読み物である。コロニスト達の起こす事件、コロニーヤの教師達の働きぶり、教育人民委員部や周辺の農民達との係り等々。マカレンコがザドーロフを殴る場面や、プリホジコの国道強盗発覚の時自分の頭にピストルをつきつける場面などは、すざまじいばかりの緊張感があり圧巻という他ない。また逆に、コロニーヤでのコロニスト達の演劇活動の場面や、フェドレンコとコルイトの耕起競争の場面などは、ユーモアたっぷりであり、思わず笑ってしまう。概ねコロニスト達の会話は生き生きと生きていて魅力あるものが多い。

しかし、こうした読みから一步進んで、マカレンコの教育実践という視点を持った時、やはり、各章ごとのトピックを分析し、メインテーマを抽出し、問題点をしっかり把握することが必要となる。そして、そのためには、先に例証したような3点を念頭におくことが必要だと思うし、また実践報告部分とマカレンコの理論の部分を読み分けていくことも必要となる。

ところで、この『教育詩』は全体が3部構成になっている。第1部はマカレンコがゴーリキーコロニーヤの創設を依頼され、トレブケ荘園の第2コロニーヤに移転するまで、第2部はトレブケ荘園を舞台にしたゴーリキーコロニーヤでの生活とコロニーヤがクリヤジに移転するまで、第3部はクリヤジを舞台としたゴーリキーコロニーヤでの生活とマカレンコがゴーリキーコロニーヤをやめてジェルジンスキーコムーナ

に移るまでである。このように、第1部から第3部まで時間的に進行していくが、実はマカレンコはゴーリキー宛の書簡(1934年9月18日付書簡、II-366~368、尚引用部分は第2巻収録の解説にも引用されている)の中で各部に意図したテーマについて論じている。それによると、「第1部では、わたしは、経験のない、誤りさえおこなっているわたしが、道に迷い、落伍した人々を、どのようにして集団をつくったかを示したかったのです。」「第2部では、わたしは訓育の主要な用具、集団を描き、その発達の弁証法性を示そうとする目的達成に力をそそぎました。」「第3部では、わたしは、この集団を行動の中で示したいのです。大量的な改造のなかでは、もはやはなればなれな個人ではありません。」「という具合に、第1部では集団の形成過程、第2部では集団の弁証法的発展、第3部ではすぐれた集団によるより大きな無秩序な集団の改造というテーマが示されている。こうした大きなテーマの中で各章が付置けられているということ把握しておくことも必要と言わねばならない。

さて、1年間、研究会で『教育詩』を読んできて、やはり教えられることの多かった読み物であった。まだ教師になってさほど年月を経ていない私にとって、学級集団づくり、あるいは学習集団づくりはまだまだ大変な仕事であるし、とてもうまくいっているなどと言えるものではない。マカレンコが集団をつくっていく時のようなとてつもないエネルギーのほんの何分の1かでも私にあれば、などと思わずない物ねだりをしてしまいたくなる程、マカレンコの集団づくりのエネルギーは莫大なものであった。また、私のクラスのある生徒が突然まじめに学校に来るようになったのは、私の指導や本人自身の自らの改心よりも、むしろ他の生徒による注意によってであった。良い方向に働く集団のエネルギーとはこうしたものであるのか、などと『教育詩』のことを思い浮べながら思ったものであった。

